

# 古きよき伝統 でんとう これまでも、これからも

## まつおばしゅう 松尾芭蕉

俳句といえば、日本だけでなく世界でも有名な松尾芭蕉は、伊賀を代表する人物の一人です。伊賀市では、毎年芭蕉の命日である10月12日に俳聖殿（俳聖とは俳諧の聖人という意味で、芭蕉の生誕300年を記念して建設された、芭蕉の旅姿をあらわした建物）において芭蕉祭を開催しています。また、この芭蕉祭にあわせて顕彰俳句の募集を行っており、毎年小中学生も俳句をつくるなど市民の多くが俳句に親しんでいます。

松尾芭蕉は、江戸時代前期の俳諧師で、蕉風俳諧という独自の俳諧を確立させた人物です。俳諧とは、室町時代に始まった伝統的な連歌を、人々が日常使用している言葉を使いこっけい味を加えて詠むもので、季語を入れた17字（5・7・5字）の発句で始め、14字（7・7字）の脇句をつけ、さらに第三句、第四句と連ねていくものです。この発句が明治時代に俳句と呼ばれるようになりました。また、俳諧師とは、俳諧をつくることを専門とする人のことで、俳諧を人々に教える人でもありました。そのため、芭蕉には各地に門人がおり、芭蕉と旅をともにしたり、句会の助けをしたりする人でもありました。杉風、去来、許六などは、その代表的な門人です。

松尾芭蕉は、1644（正保元）年に、松尾与左衛門の二男として伊賀に生まれました。19歳で藤堂藩伊賀国侍大将藤堂良忠に仕え、この頃から京都の北村季吟に俳諧を学びました。この頃の芭蕉は俳号（俳諧を作る際に用いる名前）に「宗房」を用いていました。

23歳の時に主君良忠が亡くなると、武家奉公をやめ、兄方に身を寄せていました。1672（寛文12）年、29歳で初めての撰集『貝おほひ』を上野天満宮に奉納し、俳諧師として生きる決意をして江戸へと向かいました。1675（延宝3）年、大阪の西山宗因（談林派俳諧の第一人者）を歓迎する句会に出席し、俳号を「宗房」より「桃青」に改めました。翌年、



松尾芭蕉  
(財団法人芭蕉翁顕彰会提供)

初めて帰郷していますが、以降計12回帰郷したことが記録に残っています。翌1677（延宝5）年、俳諧宗匠（師匠）となり、1680（延宝8）年には深川の草庵に移り住みました。翌年、門人の李下より一株の芭蕉（植物）を贈られ、これが繁茂しました。やがて草庵を芭蕉庵と呼ぶようになりました。これにあわせて、俳号も「芭蕉」を使い始めるようになりました。その後、1684（天和4）年に『野ざらし紀行』の旅に出たのをはじめとして、1687（貞享4）年には『鹿島詣』の旅と『笈の小文』の旅へ、翌年には『更級紀行』の旅へ、さらにその翌年には『おくのほそ道』の旅へと出かけています。この5つの旅の全行程は、延べ約4,800kmにもなります。1694（元禄7）年には、『おくのほそ道』の清書本が完成しました。その年、伊賀に帰郷後、大阪に行きましたが、そこで病に倒れ、ついに10月12日に亡くなりました。死の4日前に口述筆記させた「旅に病んで夢は枯野をかけ廻る」が最後の俳句となりました。

### 学習のめあて

松尾芭蕉は、蕉風俳諧という独自の俳諧を確立し、俳句を芸術として高めた人物として、世界的にも有名です。

芭蕉は、日本各地へ旅に出かけ、いろいろな土地に名句を残すとともに、多くの紀行文を書きました。「月日は百代の過客にして、行きかふ人も又旅人也（人生は旅であり、また旅は人生である）」で始まる『おくのほそ道』はとくに有名です。

芭蕉は、旅を通じて自然や人間を深く見つめ、いつまでも変わらないものの中にある価値を大切にしつつ、移り変わるものの中から生まれてくる価値を重視する（不易流行）という考えをもつに至ったとされています。

俳句は日本だけでなく世界にも「Haiku」として広がり、人々に親しまれています。俳句が人々に愛される理由について考え、日本の伝統や文化のよさについて話し合ってみましょう。

また、芭蕉の作品を味わい、旅を通じて自然や人間を深く見つめ、俳句を芸術として高めた芭蕉の人生について考えてみましょう。

考えてみよう

- 1 俳諧とはどのようなものですか。
  - 2 日本をはじめ世界の人々に俳句が愛されている理由について考えてみましょう。
  - 3 芭蕉は、どのような思いで日本各地へ出かけ、名句や紀行文を残したのでしょうか。
  - 4 芭蕉が生前最後に詠んだ「旅に病んで 夢は枯野を かけ廻る」は、どのような意味なのか考え、話し合ってみましょう。
  - 5 芭蕉はたくさんの句を残しています。それらの中から自分が気に入った句を選び、その句の意味や選んだ理由などについて発表してみましょう。
  - 6 俳句を通じて日本の伝統や文化のよさについて考え、話し合ってみましょう。
- ☆ 第1部の「見つめよう わたしのふるさと そしてこの国 (P104～107)」を活用し、興味のある伝統芸能や伝統音楽について調べ、まとめてみましょう。

資料

世界に広がる俳句

～ Haiku in English ～ *By Matsuo Basho*

☆英語で芭蕉の俳句を味わってみましょう。

The old pond;  
A frog jumps in, –  
The sound of water.

「古池や 蛙飛びこむ 水の音」

On a journey, ailing –  
My dreams roam about  
Over a withered moor.

「旅に病んで 夢は枯野を かけ廻る」

●日本語だけのものではなくなった俳句

【EU (欧州連合) 発】

海外初の俳句ポストは、ベルギーのブリュッセルにある駐EU (欧州連合) 日本政府代表部の建物入り口に置かれています。ファン＝ロンバイ欧州理事会議長は、自ら俳句集を出版するほどの俳句愛好家です。そこで、日本の外務省とEUは、「人的・文化的交流の促進」実施のため、毎年6月にEU英語俳句コンテストを開催しています。

【ニューヨーク発】

アメリカのニューヨーク市では、2011年11月に、俳句と絵を使った交通標識が登場し、交通安全を啓発する運動「Curbside Haiku (カーブサイド・ハイク)」が始まりました。ニューヨーク市内にある文化施設付近で事故が多発している12カ所と学校周辺道路を対象に、216枚のアート標識が設置されました。そこには、英語だけでなく、スペイン語などで書かれた俳句もあります。

俳句を芸術に高めた 松尾芭蕉

旅から旅へ

芭蕉は、日本各地へ旅に出かけ、いろいろな土地に名句を残すとともに、多くの紀行文を書きました。「月日は百代の過客にして、行きかふ人も又旅人もなり」で始まる有名な『おくのほそ道』のほか、『野ざらし紀行』、『笈の小文』、『更級紀行』などがあります。

『おくのほそ道』は1689(元禄2)年に江戸(今の東京都)を出発し、東北地方から北陸地方を回って、岐阜県までの、約2,500kmにもなる5か月間の旅でした。今のように入新幹線や飛行機もなかった時代で、さぞたいへんな旅だったことでしょう。そのような旅の中で芭蕉は右のような名句を残しています。

当時の旅は命がけでしたが『おくのほそ道』の旅を終えた芭蕉が、ふるさとの伊賀に帰り、ふたたび江戸にもどったのは1691(元禄4)年のことでした。

その3年後、芭蕉は旅の途中の大坂(今の大阪市)で病気になり、1694(元禄7)年、51歳で亡くなりました。亡くなる前に詠んだ「旅に病んで 夢は枯野を かけ廻る」(旅の途中で病気になっても、夢の中では草の枯れた野原を旅している。という意味)という俳句は、旅を愛した芭蕉の人生を表していると思われます。

「わたしたちの伊賀市」(伊賀市教育委員会)、ほかから作成

